新見公立短期大学紀要　第29巻　第2号
pp. 13－17 2009

原　著

看護過程・看護診断マニュアル「よくわかる看護過程」の作成とその課題の検討

杉本幸枝*

看護学科

（2009年2月4日受理）

「はじめて学ぶ人のための　よくわかる看護過程」を平成20年に作成した。その演習や実習での活用度および理解度を明らかにする目的で，協力が得られ，本書を活用した1年次生57人，2年次生31人を対象に調査を行った。その結果，2年次生における本書の実習中活用度は，すべての項目で50%以上であった。最も多い項目は，情報シートの書き方と評価で71.0%であった。理解度はほとんどの項目で60%を超えていた。理解度の高い項目は，長期・短期目標，情報シート，関連図であった。理解度の低い項目は，看護診断であった。1年次生における本書の活用度は，演習時はほとんどの項目で70%以上であったが，実習中の活用度は項目でのばらつきがあった。また，看護過程の理解度はすべての項目で60%以上と高い理解度であったが，看護診断名や看護診断の確定は2年次生同様に低かった。次に満足度は80%以上と高い結果であった。

以上のことから，本書は初学者にとって活用しやすく，看護過程の理解を助ける効果がある。また，今後の課題として，代表的な疾患の展開例を増やすとともに，アセスメントや関連図などさらに詳細にすることで，高学年でも活用しやすいものとなることが明らかになった。

（キーワード）看護過程，看護診断，マニュアル，活用度，理解度

はじめに

看護過程は，看護の対象である個人や集団の健康維持・回復，あるいは回復が望めないとき生活の質を向上するという看護の目的を達成するための計画的な一連の行為である。看護問題を解決するために対象の反応である情報を収集し，その情報をアセスメントすることで問題を明確にし（看護診断），目標の設定，看護計画の立案，実施，計画，評価するという一連の思考過程である。看護診断は1990年代から日本に導入され始め，本学では平成7（1995）年から看護診断を用いた看護過程を展開し，現在試行錯誤を繰り返しながら教授している。

平成16（2004）年から学生が苦手としている情報収集のポイントを示した‘アセスメントガイド’を作成し，NANDA-I看護診断[1]の修正に伴い毎年改正し活用している。また，平成18（2006）年には，記録用紙の記述に関してチェックリスト[2]の作成および学生のアセスメント能力の向上を目的とした情報シートを作成し評価を行った[3]。しかし，看護過程に関するテキスト[4]・サブテキスト[5][6]の使用や膨大な資料の配布など創意工夫を重ねているが，教授内容の煩雑化が目立ち，学生に混乱を招いていた。また，学生からの実習記録の記載例がほしいという強い希望があった。そこで，平成20（2008）年から看護過程・看護診断の本学の実情に合わせた演習や実習で活用するために「はじめて学ぶ人のための　よくわかる看護過程」[7]を作成した。2年次生には，基礎看護学実習Ⅱの前に配布し，1年次生にはこれを使って講義および演習を行った。

そこで，今回2年次生の実習における「よくわかる看護過程」の活用度および1年次生の講義・実習での活用度などを調査することで，看護過程論の教授の一助とする目的で分析を行ったところ，若干の示唆を得たので報告する。

Ⅰ．用語の定義[4]

看護過程：アセスメント，看護診断，看護計画，実施，評価のサイクルである。

アセスメント：情報を分析し，査定することで，情報の意味を明らかにする。

看護診断：収集した情報の分析・統合に基づいて対象者の健康上の問題を判断することである。

共同問題[4]（合併症の潜在的状態）：看護師が病気の発症や状態の変化を見つけるためにモニターする身体的合併症のことである。

看護計画：目標および目標を達成するための具体的な実

*連絡先：杉本幸枝　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

施計画を示すことである。

実施：目標によって方向性が示され，具体的な解決策である計画に述べられた内容を看護者と対象者が実行することを意味する。

SOAP：問題指向型システムの考え方に基づく看護記録の様式で，主観的データ（S情報），客観的情報（O情報）からアセスメント（A）することで，看護診断を解決するための計画の修正（P）を行うことである。

評価：看護診断に基づいて目標と計画を立てて実施した結果みられる対象者の状態と，達成されるべき望ましい状態とを比較することである。

Ⅱ．研究目的

「はじめて学ぶ人のための　よくわかる看護過程」の活用度および理解度を明らかにし，今後の課題を検討する。

Ⅲ．研究方法

1．研究方法：調査研究

2．調査対象：A短期大学看護学科で平成20年度に基礎看護学実習Ⅱを受講した2年次生63人および援助技術論A（看護過程論）を受講した1年次生64人。

3．調査期間：平成20年12月

4．調査内容及び方法：自記式質問紙を作成した。2年次生の調査票は，看護過程学習の理解度7項目，「よくわかる看護過程」の活用度7項目，良かった点および改善点についての自由記載を内容とした。また，1年次生の調査票は，演習時および実習時の「よくわかる看護過程」の活用度各々15項目ずつ，満足度15項目，看護過程の理解度7項目，良かった点および改善点についての自由記載を内容とした。学生に配布後，回収箱を設置し1週間後に回収を行った。

5．分析：統計ソフトExcel2007を用いて単純集計を行った。

6．倫理上の配慮

調査対象者に研究の主旨，調査結果を研究の目的以外では使用しないこと，研究への協力は自由意志によるもの，研究への協力は個人評価や成績評価とは無関係であること，研究に協力しないことで不利益を被ることがないことを口頭および文書で説明し，協力を求めた。回答をもって研究への協力の意思とみなした。

Ⅳ．看護過程・看護診断マニュアルの作成および看護過程の講義概要

1．看護過程・看護診断マニュアル「よくわかる看護過程」の作成

「よくわかる看護過程」は，第1章　看護過程の意義，第2章　看護過程の構成要素，第3章　看護記録，第4章看護診断名の理解，資料として演習用カルテの見本，情報シートの書き方，アセスメントガイド，実習記録の記載例で構成した全63ページのものである。

看護過程に対する苦手意識が強い学生が多いので，はじめて学ぶ人を対象にした平易な文章でわかりやすい表現を心がけた。第1章から第4章までは看護過程の基本的な理解を助けるための用語の定義，注意点などを詳細に記述した。また，各章に「まとめ」の欄を設け，ワークブックとしての側面を持たせた。資料として，演習や実習記録の記載例など活用しやすく工夫をした。

本書の目的は，看護過程の講義・演習，基礎実習で使用し，学生の看護過程に対する理解を深めるために作成した。

2．看護過程に関する講義・演習について

1年次後期に援助技術論Aの科目として開講し，必修で2単位，60時間の演習科目である。授業目的は「看護の対象における健康問題を総合的にアセスメントするための観察能力を養い，看護問題を解決できるための基礎的能力を育成する。」である。

講義の進め方は演習1・2を行っている。演習1では，看護過程の基礎知識を押さえながら，大腿骨頸部骨折患者の事例を使って実際に看護記録を記述し思考過程を深めていく演習を，教員5人で担当している。担当学生は1教員当たり12～13人の学生である。そして，「総合演習」として計画したことを実際に模擬患者に実施し，評価している。また，看護過程に付随する情報収集としてのヘルス・フィジカルアセスメント（バイタルサインの測定，身体計測を含む），コミュニケーションの演習を行い，基礎看護学実習Ⅰ－B（1週間）に臨んでいる。基礎看護学実習Ⅰ－Bでは受持患者の全体像を把握することを目的として情報収集を行っている。次に演習2では，基礎看護学実習Ⅰ－B終了後，受持患者に関して収集した情報をもとに看護過程の展開を行い，発表会で講義のまとめを行っている。

2年次生は，基礎看護学実習Ⅱ（2週間）で一連の看護過程の展開を行っている。

Ⅴ．結果および考察

2年次生63人から回答のあった人は31人（回収率49.2%），1年次生64人から回答のあった人は57人（回収率89.0%）であった。

1．2年次生の活用度および理解度

「よくわかる看護過程」の実習中の活用度を実習記録用紙の作成時に関連させて尋ねたところ，図1のようになった。＜大変活用した＞＜まあまあ活用した＞を合わせると，すべての項目で50%以上であった。最も多い項目

は，情報シートの書き方と評価で22人（71.0%）であった。最も少なかったのは看護診断名の14人（45.2%）で，活用しなかったと回答した人も2人いた。これは，サブテキストである「看護診断ハンドブック」[7]の活用度が高かったことが影響していると考える。

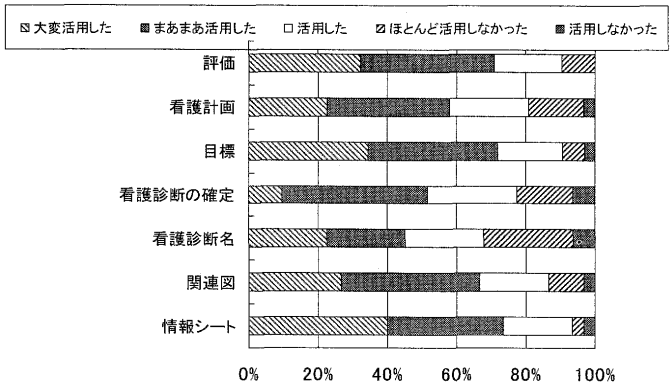

図1　2年生の実習での活用度

次に，実習終了後の看護過程の理解度について尋ねたところ，図2のような結果になった。<大変理解できた><まあまあ理解できた>を合わせると，ほとんどの項目で60%を超えていた。最も高かった項目は，長期・短期目標26人（83.9%），情報シート25人（80.6%），関連図24人（77.4%）であった。最も少ない項目は，看護診断名の確定16人（51.6%）であった。半数程度が看護診断名の確定の理解が不十分と捉えていることを考えると，看護診断についての教育不足といえよう。現在127の看護診断が開発されているが，その一つ一つを詳細に解説することは困難である。主要な看護診断名や似たような診断名に関しては定義を確認し，看護診断名について理解を深めるように工夫をしていきたい。

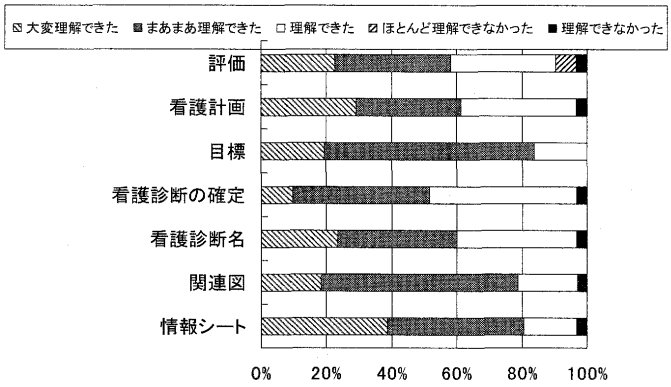

図2　2年生の看護過程の理解度

2．1年次生の活用度および理解度

演習での活用度を尋ねたところ，図3のようになった。<大変活用した><まあまあ活用した>を合わせると，ほとんどの項目で70%以上であった。最も多かった項目は情報シートの書き方54人（94.7%），看護計画・実習記録の記載例53人（93.0%）であった。最も少ないのはフローチャート33人（57.9%），次いで看護過程の意義41人（71.9%）であった。

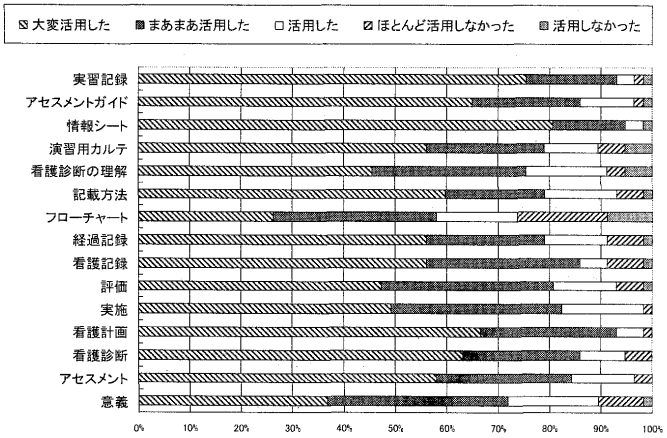

図3　1年生の演習での活用度

また，実習での活用度を尋ねたところ，図4のようになった。<大変活用した><まあまあ活用した>を合わせると，演習時の活用度よりも項目でのばらつきがあった。最も多かった項目は情報シートの書き方50人（87.7%），実習記録の記載例49人（86.0%），実習記録48人（84.2%）であった。これらは2年次生と同様な結果であった。これらのことから考えると，学生が臨地実習での看護過程で困難に感じているのは，情報収集およびアセスメントと経過記録であるSOAPであることが推測できる。また，2年次生で多く1年次生で低かった項目として評価の項目が挙がった。これは，実習目標が異なることから1年次生の関心が低かったと考える。しかし，実習中に毎日記録するSOAPのうちのAに当たるアセスメント，Pに当たる計画は看護問題となる看護診断が解決方向に向かっている

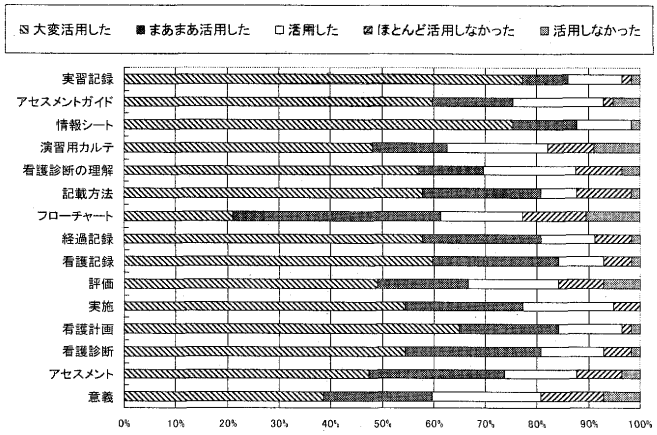

図4　1年生の実習での活用度

かどうかアセスメントし計画する，つまり評価・修正そのものである。経過記録と評価・修正が関連することを学生に強調する必要性がある。

次に看護過程の理解度について尋ねたところ，図5のような結果になった。<大変理解した><まあまあ理解した>を合わせると，ほとんどの項目で60%を超えており，高い理解度といえる。最も多かった項目は関連図49人（86.0%）であった。次いで，情報シート48人（84.2%），看護計画44人（77.2%）であった。最も低かった項目は評価32人（56.1%）であった。1年次生の看護診断名や看護診断の確定は2年次生同様に低かった。しかし，1年次生は2年次生の51.6%より37人（64.9%）と若干上昇し，60%を超えていた。

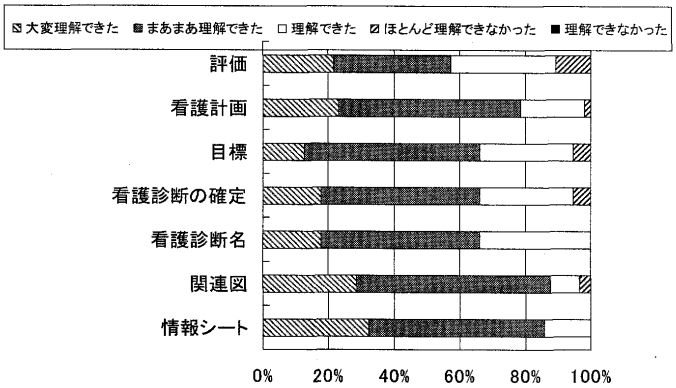

図5　1年生の看護過程の理解度

「よくわかる看護過程」の満足度について尋ねたところ，図6のようになった。各章ごと，資料の内容ごとに調査したところ，<大変満足した><まあまあ満足した>を合わせると，概ね80%を超えた結果となった。低かった項目では，フローチャートが41人（71.9%）と最も低かった。これは，講義・演習の中であまり教授していないことが影響していると考える。

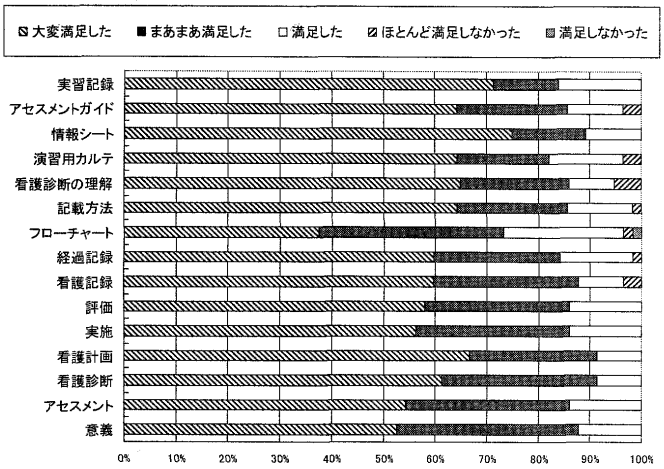

図6　1年生の満足度

3．効果と今後の課題

よかった点と改善点について自由記述を求めたところ，よかった点につては，1・2年次生に共通して「わかりやすい」「参考になった」という自由記述が多かった。しかし，改善点をみると，1・2年次生に共通している内容として，「代表的な疾患例を増やしてほしい」「関連図を詳しくしてほしい」が多く挙がった。現在は1例しかあげていないことや関連図が紙面の都合上詳細な例の提示ができなかったことが影響している。また，1年生の意見からアセスメントガイドの活用度が高いことがわかり，今後も継続して内容を修正・追加していくとともにレイアウトなど学生によりわかりやすく改定していく必要性がある。

謝辞

調査にご協力いただいた方々に深く感謝します。

文献

1）NANDAインターナショナル，日本看護診断学会監訳：NANDA－I　看護診断―定義と分類　2007－2008，医学書院，2007
2）杉本幸枝，土井英子，小野晴子：繰り返し練習で技術力アップ　援助技術チェックリスト，ふくろう出版，2006
3）杉本幸枝：基礎看護学実習Ⅰの受持患者の分析からみた看護過程教授方法の検討，新見公立短期大学紀要，28，23－27，2007
4）志自岐康子他：ナーシンググラフィカ18　基礎看護技術　メディカ出版，2007
5）リンダ J.カルペニート，新道幸恵監訳：看護診断ハンドブック，医学書院，2006
6）黒田裕子：黒田裕子の入門　看護診断　看護診断を使った看護計画の立て方，照林社，2005
7）杉本幸枝：はじめて学ぶ人のためのよくわかる看護過程，ふくろう出版，2008
8）清水佐智子，緒方重光：NANDA看護診断（分類法Ⅱ）の学習効果―13領域とその枠組みを用いた実習においてー，第37回日本論文看護学会集（看護教育），9－11，2006
9）岩田みどり：小児看護学実習における看護診断ラベルの使用状況と学生の自己評価，日本赤十字武蔵野短期大学紀要，18，15－21，2005
10）吉田宏美，安斎三枝子：看護過程のアセスメント能力に関する教育課題（1）－基礎看護学実習（2年次）

の看護問題リストの分析から－，京都市立看護短期大学紀要，31，125-132，2005
11）鈴木祐子，大西潤子，千葉京子：看護診断を用いた看護過程の学習に関する検討　その１－各論実習前・後の学習成果について－，日本赤十字武蔵野短期大学紀要，15，59－65，2002

Creation of "Easy-to-understand nursing care procedures for beginners", a manual for nursing procedures and diagnosis, and related problems

Yukie SUGIMOTO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

In 2008, we created an instruction manual: "Easy-to-understand nursing care procedures for beginners". We conducted a survey of nursing students to examine how they used and understood the manual in nursing training and exercises; consent was obtained from 57 first-year and 31 second-year students. Descriptions of all task items were referred to by more than 50% of second-year students. The largest percentage of students (71.0%) referred to the manual when filling out information sheets and during assessment. While more than 60% of second-year students understood descriptions of almost all care tasks in the manual, including short- and long-term goals, information sheets, and reference charts, a large number of students could not understand explanations of nursing diagnosis. In nursing exercises for first-year students, descriptions of almost all care tasks were referred to by more than 70% of them. However, the reference rate significantly varied from task to task in practical training. Nursing care procedures for all tasks were understood by more than 60% of first-year students, although most of them could not determine the names of diseases in nursing diagnosis. However, 80% or more of first-year students were satisfied with the manual.

We concluded that this manual is useful for first- and second-year nursing students, and it helps them learn nursing care procedures. It is necessary to make the manual more useful for senior students by providing more descriptions of procedures for common diseases and detailed explanations of assessment and reference charts.

Keywords:Nursing procedures, Nursing diagnosis, Manual, Reference, Understanding